

# いもち病防除剤をめぐる話題

近年のイネいもち病防除は、長期持続型のすぐれた有効成分の登場により、箱処理1回で葉いもちを防除するのが一般的になっている。このため、新規薬剤の開発も多く、殺菌剤のなかでは、注目されている分野である。

ここでは、この分野の最近の話題を紹介する。

## 箱処理いもち病防除剤の分類

いもち病防除剤にはいくつもの種類があるが、箱処理で使用される薬剤は、いもち病への効果のあらわしかたで表-1のように4つに分けられる。

それぞれの作用を簡単に紹介すると、メラニン合成阻害剤は、イネいもち病菌がイネ体内に侵入するときに必要なメラニン(黒色の色素)をつくれなくさせることでイネへの侵入を防ぐ作用、抵抗性誘導型薬剤は、イネいもち病に対する抵抗力を高めることで病気の進展をおさえる作用、ストロビリリン系薬剤は、イネいもち病菌の生育をおさえる作用を示す。また、メラニン合成阻害剤は、メラニンをつくれなくさせる方法のちがいにより、シタロン脱水酵素阻害型と還元酵素阻害型との2つに分けられており(図-1)長期持続

型のウィンやデラウスはシタロン脱水酵素阻害型に分類される。

## MBI-D剤耐性菌の出現

ウィンやデラウスといったシタロン脱水酵素阻害型メラニン合成阻害剤(以下MBI-D剤と略す)は、そのすぐれた効果や残効性から、現在多くの地域で使用され、重要ないもち病防除剤として評価が高い。

ところが、近年、本系統剤に耐性を示すイネいもち病菌が九州地方や西日本の一部に発生し、問題となっていたが、今のところ、これら地域以外からは耐性菌は検出されていない。そのため、発生のない地域ではMBI-D剤を使用しても問題はないと考えられるが、念のため注意する必要がある。

今後、耐性菌の発生を未然に防ぐためにも、今一度いもち病防除の基本にかえり、種子消毒や種子更新など種子段階での防除の徹底や置き苗の除去、採種圃での穂いもちの徹底防除といった対策が必要である。可能なら、1つの薬剤系統に偏らず、作用性の異なる薬剤を隔年使用するなど、耐性菌発生リスクを軽減させることが望ましい。

なお、とくにMBI-D剤にかぎったことではないが、もし箱処理剤の使用後にイネいもち病が多発した場合には、できるだけ早く作用性の異なる薬剤で緊急防除をおこなうようにしたい。これは、すぐれた薬剤も防除のタイミングを逃すと十分な効果を発揮できないことが多く、早めの防除が蔓延防止のために重要だからである。

【全農 営農総合対策部  
農薬研究室・宗 和弘】

表-1 主な箱処理いもち病防除剤の分類

分類	有効成分名(商品名)
メラニン合成阻害剤 シタロン脱水酵素阻害型(MBI-D)	カルプロバミド(ウィン) ジクロシメット(デラウス) フェノキシニル(アチーブ)
メラニン合成阻害剤 還元酵素阻害型(MBI-R)	ピロキロン(デジタルコラトップ) トリシクラゾール(ビーム)
抵抗性誘導型薬剤	プロベナゾール(Dr.オリゼ,オリゼメート) チアジニル(ブイゲット)
ストロビリリン系薬剤	アゾキシストロピン(アミスター) オリサストロピン(嵐・登録申請中)

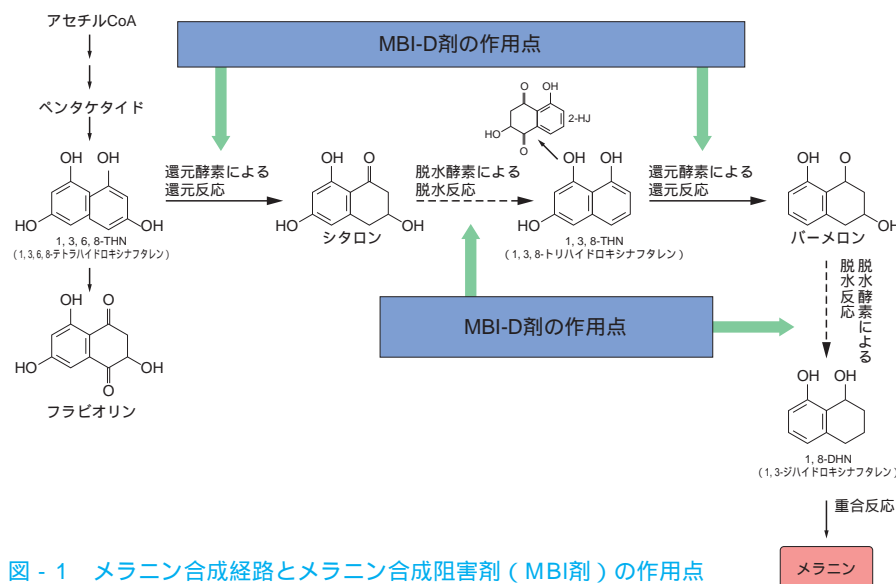


図-1 メラニン合成経路とメラニン合成阻害剤(MBI剤)の作用点(倉橋らを改変)